

研究成果情報

平成 26 年度

| | | |
|--|-----|--------------------------------------|
| 日本なし「新美月」と「新王」の省力的着果管理技術 | | |
| [要約] 着果が安定している日本なし自家和合性新品種「新美月」と「新王」の着果管理技術を開発した。開花前に除芽で花芽数を1mあたり6芽に制限する方法で省力的な管理が可能となる。 | | |
| 新潟県農業総合研究所園芸研究センター 育種栽培科 | 連絡先 | TEL 0254-27-5555 FAX 0254-27-2659 |

[背景・ねらい]

新品種「新美月」と「新王」は自家和合性を有しているため人工受粉作業がいらず、4月の作業労力が大幅に削減でき、開花期の天候不良条件にも強い。しかし、従来の品種と同様の管理方法では実が成りすぎて摘果労力が増加するという弊害が生じる。そこで、新品種に適した着果管理方法を実施することにより、省力化と高品質化を実現する。

[内容]

- 1 「新美月」と「新王」の花芽数制限方法として除芽が有効である。従来の摘らいに比べて処理が容易で、作業可能期間は剪定後の3月から開花前までであり、摘らいに比べて長い(図1)。
- 2 除芽の処理は、短果枝部分と長果枝部分を合わせた側枝の長さ1mあたり6芽を目安とし、最終着果予定数の花芽を残し、それ以外の花芽を除去する(図2)。
- 3 除芽により開花時の葉数は少なくなるが、開花1ヶ月後にはほぼ回復する。葉果比は低めとなるが、果実肥大等への影響はみられない(図3、表)。
- 4 短果枝花芽では子持ち花がみられ、特に「新王」は発生しやすいので、開花期に確認し、発生が多い場合は子花取りや遅れ花の除去を実施する(データ略)。
- 5 摘果は満開後20~60日の間に1~2回行い、1果そう1果に仕上げる。

[導入効果]

- 1 簡単な作業で作業可能な期間も長いので経営規模の拡大が可能となる。
- 2 適切に実施することで摘果作業の省力化が図られ、高品質果実生産が可能となる。

[導入対象]

「新美月」と「新王」の生産者

[留意点]

- 1 従来の品種並みに花芽数を残すと、着果過多が生じ、摘果労力の増加や品質低下につながる恐れがあるので、「新美月」と「新王」では開花前の花芽数制限を必ず実施する。
- 2 仕上げ摘果は早く実施するほど大果となるが、変形果は増加する傾向がある。早期に摘果を実施する場合は、形の良い幼果を残すように丁寧に実施する。
- 3 2品種とも着果は安定しているが、着果が不足気味の場合や、霰害が認められる場合は部分的に1果そう2果着果としても果実品質への影響はほとんどみられない。
- 4 除芽した部位には短果枝花芽が慣行と同等に着生するため、翌年の着果に影響はない。
- 5 「新美月」、「新王」の特性については、平成26年度研究成果情報『人工受粉が不要で“おいしい”日本なし新品種「新美月」と「新王」』を参照する。
- 6 本技術の詳細については新潟県農業総合研究所ホームページ上でも公開予定である。

[具体的データ]

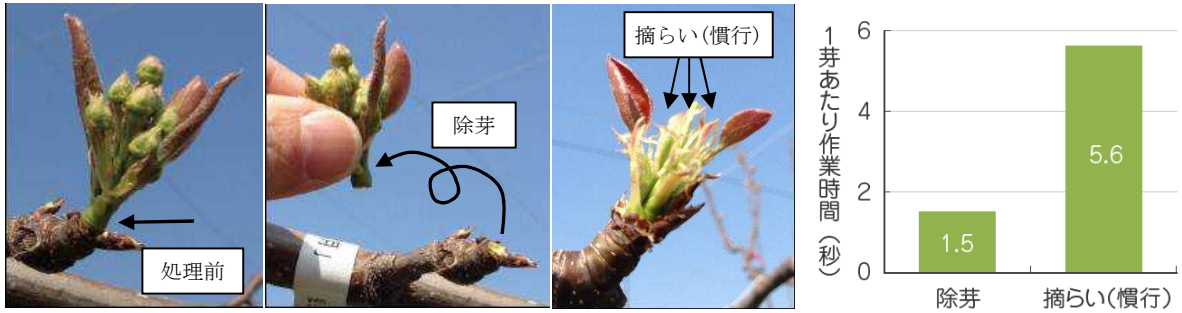


図1 除芽の処理方法と処理に要する時間の比較

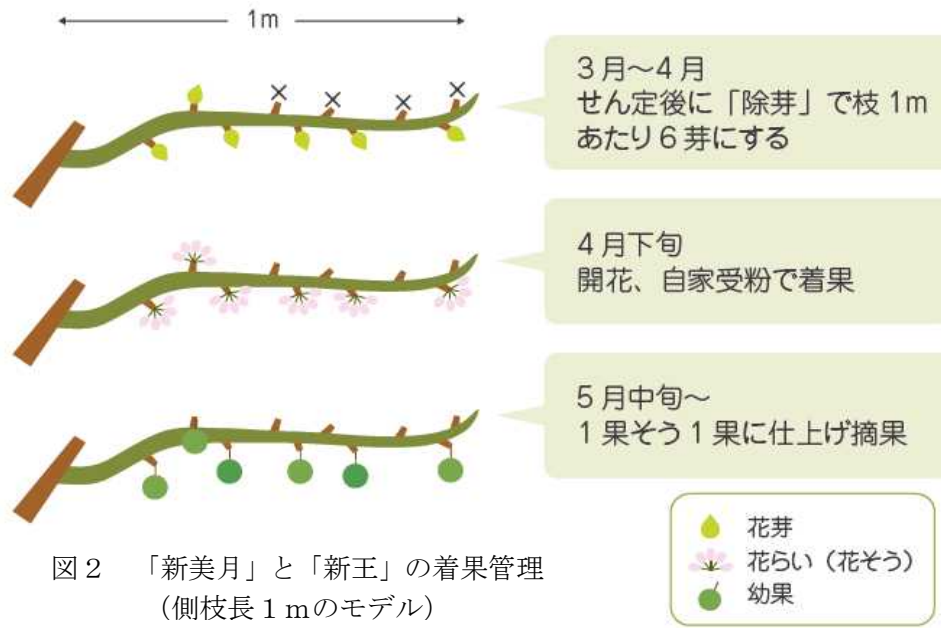


図2 「新美月」と「新王」の着果管理
(側枝長1mのモデル)

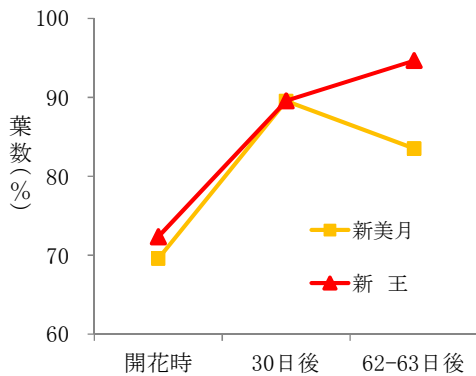


図3 除芽した側枝の葉数変化
(平成24,25年平均、摘らい区の葉数を100とした相
対値、新美月と新王は満開40日後頃に摘心を実施)

表 着果管理方法の違いと葉果比、果実品質

| 品 種 | 処理方法 | 葉果比 (葉/果) | 果重 (g) | 糖度 (Brix%) | 酸味 (pH) |
|-----|------|--------------|-----------|---------------|------------|
| 新美月 | 除 芽 | 20.9 | 355 | 13.6 | 4.6 |
| | 摘らい | 24.2 | 352 | 13.6 | 4.6 |
| 新 王 | 除 芽 | 21.0 | 507 | 13.9 | 5.0 |
| | 摘らい | 23.3 | 461 | 13.8 | 4.9 |

(平成23～25年の平均値、葉果比は7月上旬の側枝内の値、果実品質
は一斉収穫の値)

[その他]

研究課題名：気象変動に強く大幅省力化が可能なニホンナシ自家和合性品種の結実管理技術開
発

予 算 区 分：農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業

研 究 期 間：平成23～25年度 発表論文等：なし